

かながわ畜産まめ知識

家畜のエサ(飼料)

エサの種類

家畜のエサにはいろいろな種類があります。どの家畜でも栄養のバランスをとるために、さまざまな工夫をこらした飼料が与えられています。

エサには、大きく分けて「粗飼料」と「濃厚飼料」があります。「粗飼料」は、草または草から作られたエサで、草食性の牛では主食にあたり、ボリュームがあって満腹感を与えます。生のままで与えるほか、乾燥させたり(乾草)、発酵させたりして(サイレージ)保存性を高めて利用します。

穀物を中心とした「濃厚飼料」は、繊維質中心の粗飼料に比べ、デンプンやタンパク質を多く含むエサで、牛ではおかずにあたります。とうもろこし、米ぬか、大豆油かす、ふすま(麦粉精製時のくず、皮など)、大麦などで、数種類を混合して販売されているものは「配合飼料」と呼ばれます。

なお、雑食性の豚や鶏では濃厚飼料のほうが主食です。



粗飼料の例



濃厚飼料の例と
豚用配合飼料(下)

家畜ごと(家畜別)のエサ



乳用牛と肉用繁殖牛(子牛をとるための牛)では粗飼料を多く(4~6割)与えます。一方、肉用肥育牛(肉を生産するための牛)と豚、鶏では濃厚飼料の給与量が9~10割を占めます。

どの家畜も、成長段階と目的に応じて異なる栄養価のエサが与えられます。例えば、育成期の家畜は健康に大きく育つためのエサ、搾乳牛は良質な乳をたくさん出すためのエサ、肉牛は脂肪(サシ)と肉量をつけるためのエサなどです。また、季節によってエサの種類や量を変える、例えば冬場は量を増やして体力の消耗を防ぐなどの工夫も。

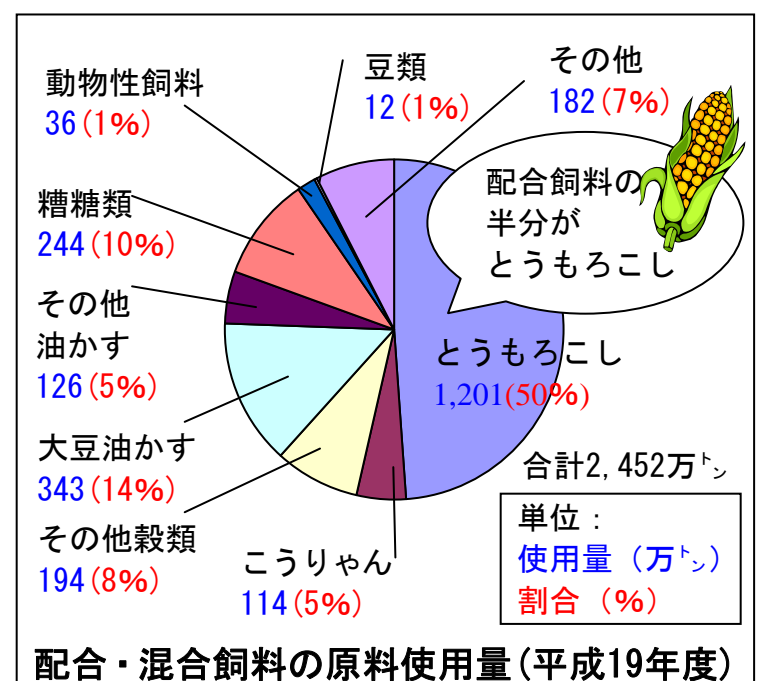
また平成13年の国内での牛海綿状脳症(BSE)発生以降、牛に与えるエサには動物性タンパク質の混入が禁止されており、県では飼料の安全性確保の指導を行っています。畜産技術センターではこの中で流通飼料の分析を担当しています。

エサの自給率

畜産業の特徴のひとつとして、飼料原料を国内供給で補うことができないために、飼料自給率が国全体で約25%と低く推移していることがあげられます。粗飼料の約8割は国産でまかなわれていますが、濃厚飼料の約9割は海外からの輸入に頼っています。

平成18年から20年にかけてとうもろこしのバイオエタノール原料としての需用が増加し、飼料と競合したことや、原油価格の高騰などの影響を受けて、配合飼料や粗飼料の価格が急激に高騰しました。

安定的な畜産経営を通じて国内の持続的な食料生産を支えるためには、飼料作物の生産(自給飼料)や食品残さの飼料利用などにより、エサの自給率を高める努力が必要となっています。



農林水産省ホームページより